



オーリンゲン

# 拡がれ Orienteeringの輪

市民マラソン大会、市民テニス大会など多くのスポーツにおいて市民大会は開催されている。しかし、決してそれがレクのイメージにならないのは、練習の場と大会の場が異なるからである。オリエンテーリングのナビの技術はなかなか日常では練習しがたく、最初は大会でゆっくりとしたペースでナビの技術を修得し、少しずつ速度を上げていくという成長の過程をとる。また、それをクリアしたらやや高度のナビを修得、更に高度のナビに挑戦するという成長を目指す。また、オリエンテーリングには「道迷い」ということがあり、安全を考慮し、グループではじめることで安心して入門している。子どもに対しては親がつくことが事故防止のために自然な形で行なわれてきた。それもレクのイメージが払拭できないことにつながってきているようである。

多くのオリエンティアがレクのイメージを払拭したいと思う一方、オリエンテーリングに接しやすいようにクイズやビンゴのようなレクの要素を取り込んで参加者に楽しんでもらっている例もある。しかし、定着させるという点ではほとんど効果が無いことがわかってきている。

一方、他のスポーツのようにスポーツ教室でじっくり技術をつけていくという方法も多くの団体・個人で試みられたが、参加者集めに苦勞し、成功例は聞いていない。

そのような体験を重ね40年を経過した現在、どのような新人養成の道を探るのがよいのか、考えて見たい。

昭和40年代に多く用いられた徒歩オリエンテーリングという言葉はなくなっており、現在では走ることを禁じる大会は皆無と思われるが、日本の社会からオリエンテーリング＝ウォークラリー、クイズラリーのイメージは払拭できていない。

### 初めから一人で走る指導が必要（藤島）



藤島 由宇（三条オリエンテリングクラブ）

#### 【藤島】

私は全国のオリエンテリング大会のイベントの内容を調べてみると、依然としてグループオリエンテリングが主体と思われるイベントが多く開催されていることを知り驚いたとともに「ぞっと」もしました。

オリエンテリングは1人で走るスポーツです。この認識はオリエンティア全員が共有していると思います。では「グループで歩く」のもオリエンテリングですか？

この点についてはまだまだ肯定的な方が多いでしょう。もしかしたら「グループで歩くのはオリエンテリングではない」と主張しているのは私くらいのもかもしれません。

これら市民向けイベントでは、家族・親子や同級生などのグループで歩く「フィットネスO」が採用されています。初オリエンテリングの子どもにもコンパスを持たせ、スタート直前に大人でも難しい整置や地図記号の説明をするという無茶が全国各地で繰り広げられ続けています。

では「フィットネスO」をやった家族や子どもたちはその後競技者登録をして1人で走るオリエンテリングを続けていますか？続けていませんか？それなのになぜまだグループで歩く方法を続けるのですか？

「1人で走るスポーツ」であるオリエンテリングの普及に役立つはずが無いのです。普及に役立つどころか引き続き「オリエンテリングはグループで歩くレクリエーションである」という既存イメージを拡散し続ける結果になるのです。

子どもというのは、走りたがるものです。皆さんも駅で子どもたちが電車をおりるや否や走り出し、出口へ向かう階段を駆け上っていく光景をご覧になったことがあるかと思

ます。

子どもが走るの、「1秒でも早く目的地に着きたいから」だと考えています。実際私の小学生時代を思い出してみても、やはり「楽しい事がある」目的地に早く着きたいから、電車を降りてすぐ駆け出していたのだと今でも確信しています。

ところがオリエンテリングが日本に伝わって以来、私たちは「徒歩ラリー」「徒歩オリエンテリング」「トリムオリエンテリング」「フィットネスオリエンテリング」と、歩いて行うオリエンテリングの方法をも今なお連綿と続けてきています。

本来走りたがる子どもに、この40年以上にわたって全国各地で「歩かせるオリエンテリング」をさせ続けてきた事を、皆さんはどのように感じになるでしょうか。これは子どもにもオリエンテリング関係者にも全くメリットのない、大変不幸な歴史であったと断じざるを得ないのです。

オリエンテリングに必要なスキルである整置やコンパスの使い方、地図記号などについてはスポーツ少年団なり地域のクラブが組織的かつ継続的な方法で技術指導をしていく他に、オリエンテリング普及の道はないのです。これが今まで日本で行われてこなかったから、日本で「1人で走りタイムを競う」オリエンテリングが普及しないのです。

「オリエンテリングはグループで歩くレクリエーションである」というイメージを、我々は40年かけて日本社会に浸透させてきました。その結果、子どものうちからオリエンテリング選手として育成される者はごくわずかに限られ、多くは大学クラブに依存せざるを得ず、世界選手権で日本が戦えない大きな理由になっています。

本当に「1人で走りタイムを競うスポーツ」であるオリエンテリングを普及させたいのであれば、このレクリエーションのイメージを消して行く作業をしていかなければなりません。

その第1歩が「フィットネスO」の廃止、あるいはグループで歩くオリエンテリングの方法の呼称変更だと私は考えています。これについて私はJ O Aや関係者に求めて行きたいと考えています。

ですからJ O A、あるいは各地の責任者、あるいは日本のオリエンティアが今後も「グループで歩くレクリエーション的な方法」もオリエンテリングと容認し続けるのであれば、誠に残念で悔しいですが、私は日本でのオリエンテリング普及をあきらめません。

### 初心者のためにはグループも必要（村越）

#### 【村越】

いくつか問題点を整理すべきだとも思います。

- ①市民向けイベントを開催すべきかどうか？
- ②市民向けイベントの内容が現在の形式でよいのかどうか？

1：グループ      2：歩く  
 まず簡単に賛否を表明すると、

①条件による

- ②1：グループを基本とすべき
- 2：「歩く」と規制しない

①について、確かに市民向けイベントの数は多い。1970年代の普及の遺産とも言えるものです。現状はどうあれ、これはオリエンテーリングの普及の素材になることは確かです。そうなるためには工夫が必要です。今のやり方では一回限りになる人がほとんどでしょう。それは奥深さを感じられないからだだと思います。それが提示できれば、普及の促進になると思います。たとえばいくつかのロゲイニング大会では確実にリピーターを得ています。しかし、そのオリエンテーリングへの参入については最近僕も多少懐疑的になっています。その根拠は別の機会に示すつもりです。しかし、3000m競争に全ての人が魅力を感じなくてもマラソンには感じるし、それがランニングトータルには寄与するという関係はありえるでしょう。

さらに、私見ではこれらの市民大会を運営する地方の協会やクラブはそのノウハウと、そのモチベーションを持ち合わせていないのだと思います。

ちなみに、オリエンテーリングがレクとして見られていることについては、昔はストレートに反発しましたが、今は「そういうやり方もあります」程度に言います。そういう下部構造がないとスポーツの大きな発展は見込まれない。特に子どもたちには。

② グループは初心者がオリエンテーリングに入る上で、重要なオプションです。確か35年くらいまでに来日したスイスの当時のエリートランナーも、「初心者は「歩け」とは言われないが、グループ（ペア）でやるね」というコメントを残していました。

②2： これは藤島さんと全く、同意見です。「歩け」というのは恣意的で、人間の本性を無視したつまらないルールです。ただし、これは1980年代以前の新聞記事でのマラソン紹介などを読むと分かるのですが、徒歩オリエンテーリング導入期に、「走ることは多くの一般大衆が苦痛に思う」という社会認識があったという背景も、指導的立場にある人間としては理解しておく必要があると思います。ただ、JOAのフィットネスの規程にはグループで行なうとか走ってはいけないという記述はありません。

## トップオリエンティアのためにも遊びのイメージ払拭は必要（小野）

【小野】

私も大勢集まるイベントで家族や子ども向けの体験会を行っていますが、実際の大会では成果が全くでてきません。

愛知県協会がやっているフラワーウォークも同様で、イベントにはたくさん来たよといっても愛知県のオリエンテーリングが盛んになったという実感はありません。大学クラブにおいても、遊び感覚のニュアンスで勧誘すれば入会は多いが、実になるものは少ないという現役学生の声も聞いています。しかし、競技一辺倒でも新に始める人はほとんどいません。そういう苦難に耐えながら、多くの関係者がなにか効果的な手法は無いかと智恵を絞って40年たちました。いまだに多くの関係者が解決方法を見つけられず苦勞をしています。

私はレク的なイメージがあると、トップオリエンティアが練習をするにも、社会、金銭などあらゆる面でやりにくいと思います。競技人口は少ないけどちゃんとスポーツとして認められている競技はたくさんあります。あそびのイメージが蔓延することはトップオリエンティアにとってもプラスではありません。

村越さんのフィットネスOについての説明を補足すると、現在は走ってはいけないと規制している大会は要項を見る限り、ありません。



村越 真（静岡オリエンテーリングクラブ）

【村越】

僕は1%でもトレランやロゲインからオリエンテーリングを始める人がいればまずは成功だろうと思っています。

ちなみに、先日、富士のロゲイニングで三河高原トレランがきっかけでトレランをはじめ、さらにロゲイニングを始めたという人に会いました。彼は今年の1月のNZのロゲインの世界選手権に出かけます。東京の奥武蔵ロゲイニングでは参加者の10%近くがランニングを主にやっている人です。たぶんトレイルランナーから一足飛びにオリエンテーリングは難しいのだと思います。

藤島君も、ロゲイニング等には懐疑的ですが、ロゲイニングの参加者の競技志向考という点だけなら、オリエンティアより高い人は多いというのが印象です。少なくともトレーニング量という点では。彼らが、オリエンテーリングそのものではないにしてもナビゲーションスポーツにおいて重要な役割を果たす人材を生み出しているというのも、多くのロゲ

イニング大会を開催した結果、実感としてあります。また、オリエンテーリング界にはいなかったタイプの人材を惹きつけているという印象があります。

藤島君が指摘するような競技オリエンテーリングを育てるというコア的活動は重要ですし、スポーツ少年団という活動にも共感します。しかし現実にはその試みは成功していますか？これが成功し、また成人として実を結ぶまでには早くても10年はかかると思います。その間、ナビゲーションスポーツの下支えをする活動は重要だと思います。

最近ブランディングという言葉を知りました。この言葉で、自分のやっていることがより明確になった気がします。ブランディングとはマーケティングとは違い直接の顧客獲得を求めないが、将来的な市場拡大につながるイメージづくりを指すそうです。

登山者への読図指導も、ミニオリエンテーリングも、ロゲイニングも僕にとってはブランディングです。ボールを蹴る人が全くいなかったらサッカー選手の素晴らしさはわかりません。ボールは小学校でも中学校でも蹴りますが、ナビゲーションはいずれでもほとんどしません。

手前みそになりますが、今登山界では読図・ナビゲーションに対する重要性の認識とそれにオリエンテーリングが大きく関係する手法であることの理解は10年前とは比べ物にならないくらい進みました。少なくとも彼らはナビゲーションの必要性を知ったり、それに楽しさを見出す人たちであり、コアなオリエンテーリングの価値や意義を一般の人よりも高く評価する人たちです。

社会的評価の向上は普及だけでなく、競技性という点でも重要です。楽しさで競技スポーツを極められる人はごく一部です。僕は日本の選手が今一つ突出できない理由の一つの社会的評価の低さがあると考えています。特に多くの選手が大学クラブ出身で、しかも大学クラブでは、オリエンテーリングに対するマイナー意識が強く、その活動に誇りを持っていないという残念な状況がまま見られます。ブランディングによる評価者の拡大は、必ずや競技スポーツのトップ選手のモチベーションに強く影響します。40才過ぎた僕ですら感じたのですから若い選手ならなおさらだと思います（教え子の学校でミニオリエンテーリングを教えた時、その教え子が、「この人は野球でいえばイチローみたいな人なんだ」といってサイン攻めにあいました）。実際、一緒にミニオリエンテーリングをやってみれば、そのタイム差に、小学生の多くは心からそう思うことでしょう。

#### 【小野】

トレランやロゲインから1%（1000人に10人）入ってくれば効果は実感できると思いますが、現実には皆無という感じです。

オリエンテーリングの普及という点では、トレイルランナーにはナビが不要であり、オリエンテーリングには全く興味がありません。

#### 【藤島】

問題点を整理する事は議論にあたり重要ではあるのですが、いま村越さんがすべきことはこのように個々の事柄について分析していくことではなく、ロゲイニングを普及させることでもなく、日本のオリエンテーリングをどうするのか？という大きな視野に立つビジョンを、日本のオリエンテーリング関係者に指し示し、現場を動かすことではないかと思うのです。村越さんにはもっとオリエンテーリング界の人の方を向いて欲しいのです。「ナビゲーションスポーツ」などという言い方でごまかさないうで欲しいのです。

このビジョンが中央から示されなければ、現場の方の活動はこれまで通り同じように続けられて行くでしょう。それはすなわち、惨状がより深刻なものになるということです。

#### 【横田】

僕にとってのオリエンテーリングの楽しみは、なんと言っても地図でコントロールを探し出すことにつきます。速くフィニッシュできればそれにこしたことはありませんが、探すこと自体が楽しいのです。ですから、道沿いにコントロールを置いてあるコースは、全然楽しくありません。

確かに競技としては、読図力+体力を備えることが、スポーツとして必要ですが「走らないからオリエンテーリングではない」と言い切るのはいかがかと思います。「歩け」と指定するのは問題だと思います。

オリエンテーリングには、いろいろな楽しみ方があっていいと思います。

例を挙げるとマラソン大会です。なぜ、ホノルルマラソンや東京マラソンは人気があるのでしょうか。

マラソンは確かにスポーツですが、タイムを競うことよりも走ることに意義を見いだして、いろいろな楽しみ方をする人が、時間規制の緩い大会に参加しています。だからといって、「そんなのはマラソンではないからしっかり走れ」とは、藤島さんは言いませんよね。

最近では、マラソンとピクニックを組み合わせて、マラニックという言葉もあるくらいですが。



横田 実（岸和田オリエンテーリング協会）

今回、議論のきっかけとなったスポレクなどでのオリエンテーリングが、なかなか競技に結びつかないので、藤島さんもいららして、ああいう考えになるのでしょうかね。

どのようにして普及すべきかという議論は今に始まったことではありませんが、どうも前に進みませんね。

#### 【藤島】

マラソンの例を挙げていただきましたが、マラソンは「走る事」が必要なのであって、遅いか速いかは関係ありません。走らなかつたらマラソンとは言いません。

オリエンテーリングも同じだというのが私の考えなのです。横田さんもコントロールを探す事自体が楽しいとおっしゃっておられますが、勿論この事はオリエンテーリングの魅力に含まれている事であり、横田さんと同じ考えのオリエンティアは多数おいででしょう。

しかし横田さんもタイムに関係なく「1人で走る」オリエンテーリングをなさっていますよね？ここを強調したいのです。「いろいろな楽しみ方」をする条件としてマラソンは「走る事」が前提にあるように、オリエンテーリングも「走る事」を前提条件にしないと、いつまでたっても「オリエンテーリングはグループで歩くレクリエーションである」というイメージが無くならないでしょう。走るか走らないかの違いはものすごく大きいです。

実は競技規則の定義に「オリエンテーリングとは、…(略)…、可能な限り短時間で走破するスポーツ」と書かれています。定義にこのように書かれているのに「いや、走るのが苦手なら歩いてもいいですよ」なんて都合の良い事を言ってきたから、今の惨状があるのです。この点は是正する必要があります。

この定義を度外視したのが「フィットネスO」であって、その意義が本来のオリエンテーリングとは全く異なり、もはやオリエンテーリングとは別物の活動として扱わなければならないはずなのです。フィットネスOは歩かなければならない訳ではないと言うことは勿論把握しています。

オリエンテーリングは歩いてもできてしまう…これが大きな、大きな落とし穴でした。競技者登録者の減少、相次ぐ大学クラブの廃部、地方協会のJOAからの退会…これらの現状を打破するためには、現状、あるいはこれまで是としてきた事を否定しなければなりません。

「これまでやってきた事は間違っていた」と。それが出来る立場にあるのが、社団法人日本オリエンテーリング協会専務理事たる村越真さんに他ならないのです。

#### 【村越】

オリエンテーリングの間違ったイメージという点については今に始まったことではありません。むしろオリエンテーリングは、何か目的地を目指して課題をクリアするゲームの比喩的表現として1970年代から使われていたと思います。これを

払拭するためには、むしろ名称を変えることしかないと感じています。

誤った理解が蔓延しているという事実を受け入れた上で、それをどううまく活用するかを考えるべきだというのが僕の主張です。とにかく野外活動施設での実施も含めて、圧倒的多数の社会とオリエンテーリングとの接点は、こうしたゲームにあるという事実を見据えるべきでしょう。「間違ったイメージ」の形成を絶対的な害悪と捉えるのは得策とは思えません。

少なくとも名称とゲームのアナロジー的な理解を促進する役には立っているでしょう。ひょっとすると、そこから「さらに一歩進んだこと、もっとアドベンチャラスなことをやってみませんか？」と活用することも可能でしょう。その努力を、現在のオリエンテーリング界が怠っていることは確かです。この問題意識はこのメーリングリストの多くの人が共有していると思います。

そこでも、やはりナビゲーションゲームの階層構造的な理解とPRが役立ちます。その中では当然、ナビゲーションとはどういうゲームであるかを明確に示す必要がありますし、かつてのような「あてずっぽ」「偶然」でチェックポイントを見つけるようなゲームではないという「競技性」は強調すべきでしょう。

人間少し上の目標が提示されることで興味や関心がわくものです。それに興味を示さない人もおいででしょうが、その人たちはいずれにしろ競技的なことには目が向かないのではないのでしょうか。



香港にて(APOC)

#### 【藤島】

先のオリエンテーリングマガジンのオピニオンでも書きましたが、今行われている家族が参加する短時間のロゲイニングは、30年前に繰り広げられたオリエンテーリングと全く同じとしか思えないのです。家族で参加して「楽しかったね～」で終わるパターンです。

昨年度の普及方法研修会では、全日本オリエンテーリング大会の参加者推移グラフが示されました。第1回と第2回はトリムの参加者が圧倒的に多かったのですが、それ以降のトリムの参加者は減少を続けました。

これはすなわち、トリムの部に参加した方の多くは、その後オリエンテーリングは続けていない…という事です。

2008年3月の大阪全日本前日のオーフォーラムで、「読図講習会」「愛媛のレクOの取り組み」「奥武蔵レクOゲイニング」の事例紹介がありました。私も読図講習会のお話をさせていただきました。

要項をウェブで振り返りますと、タイトルが「普及の夢を広げよう！今、私たちにできること」とあります。

今思い出してみても最後の質疑応答ではロゲイニングに関してばかり質問があり、あたかも「ロゲイニングを開催すればオリエンテーリングの普及になる」と、フォーラムの参加者に思わせた感は否めません。あるいはそのような狙いでこの3つの事例を示したんですよね。昨年の普及方法研修会にしても同じです。

村越さんは「ロゲイニング参加者のオリエンテーリング参加については最近僕も多少懐疑的になっています」とおっしゃいました。

この2年の間に、「それスコアOでしょう？」と思える短時間制限の「ロゲイニング」に名を借りたイベントが各地で開催されています。「オリエンテーリングの普及になると思ってロゲイニング大会を開いたのに、普及にならないじゃないか！」という声が出てきてもおかしくない時期にきています。そのような声にどのように対応、説明されるかをお尋ねしたいです。

#### 【小野】

日本でのロゲインの説明を見ると、これはスコアオリエンテーリングではないかとだれもが思う説明です。しかし、オリエンテーリングとの関係は十分表現されていません。オリエンテーリング関係者ならオリエンテーリングとの関係をしっかり表現しておくべきです。

オリエンテーリング関係者がスコアOといわず、ミニロゲインというのは残念なことです。



木村佳司（長野県オリエンテーリング協会）

#### 【木村】

私にとってオリエンテーリングとロゲイニングの境目はありません。

私の方針は競技規則に強く縛られることなく特徴を出した

アウトドアスポーツ・ナビゲーションスポーツを提供し安全に楽しめればよいというものです。

オリエンテーリングやロゲイニングの本質を理解した上でかなりのローカライズを意図的に行います。

ナビゲーションスポーツを考えたときその地域によって最適な形態がたまたまオリエンテーリングなのか、ロゲイニングなのかというだけなのです。

もともと霧ヶ峰には毎年市民オリエンテーリング大会がありました。この地図のリメイクが、諏訪市オリエンテーリング協会に要請され大会刷新の相談もありました。

トレインの特性を考え、霧ヶ峰に適した3時間ロゲイニングを提案しこれを実施しました。

従来通りの市民大会オリエンテーリングは今でも実施しています。

オリエンテーリングの競技者確保に関して長野では全日本リレーを中心とした選手の取り込みにて行っています。

ここではオリエンテーリングを前面に強く出して仲間集めを行っています。

スポーツはクラブでしか存続しえないという点も強く感じています。

こうして集まったメンバーを中心にロゲイニングも実施していますがそれはトレーニングであったり、イベント自体を楽しむといった面が強いですね。

私は理想論者ではなく、実践主義者ですからオリエンテーリング、ロゲイニングなどあまりこだわりなく進めています。

### ロゲインよりオリエンテーリングの発展に結びつく活動が急務（菅原）



菅原琢（多摩オリエンテーリングクラブ）

#### 【菅原】

私もいまや「JOA側の人間」だったりするわけですが、JAの推進するロゲインに関する活動には賛成しかねる1人です。

オリエンテーリングとロゲインの間に対立の構図をつくるべきではありませんが、現状、

1. ロゲインはOLの普及には役立っていない

## 2. まますますOLは衰退している

と「私は感じて」います。

ここでロゲインに否定的な意見が上がると言うことは日本のオリエンテーリング界にもロゲインを快く思っていない人がそれなりの数いて、マグマが溜まりつつあるということをロゲイン推進派は意識しておく必要があると思います。

私は併存・共存して双方が発展していけばよいと思うのですが、今はオリエンテーリングを蔑ろにしてロゲインに力を入れすぎだと感じています。

少なくとも、J O Aはオリエンテーリングの組織なのだから広報や実際の活動でロゲインがオリエンテーリングより目立ってはいけないと思います。

「オリエンテーリングのために何とかする」ことはロゲインのシリーズ戦を企画するよりはJ O Aとしてプライオリティの高い仕事だというのが私の意見です。

ロゲイン大会を開催して資金集めをしてそれをオリエンテーリング界の復興に充てるのが目的です、と定義してくればニュアンスはだいぶ変わります。

### 【小野】

ロゲインによってもオリエンテーリング参加者に変化が見えないという実感が、私も含めて藤島さんや菅原さんの御指摘だと思います。

村越さんも一生懸命やっつけてこられたので、少しでも成果を感じたいと思っておられると思います。が、彼らの声に耳を傾けたら、より成果があがるのはどうしたらよいかということがお分かりになるのではと思います。

ロゲインは巨大な、体力を重視したスコアオリエンテーリングであると定義すればだれもが納得いただけるでしょう。「オリエンテーリングを含めたナビゲーションスポーツをどう発展させていくかという視点です。」という村越さんの言葉については、個人の活動の範疇だと思います。オリエンテーリング以外のナビスポーツがオリエンテーリングに寄与するのなら多くの理解を得られますが、長年の動きからそれに期待しても無理があります。



小野盛光（三河オリエンテーリングクラブ）

### 【菅原】

決してロゲインをいけない、と言っているわけではないんです。少なくとも私は、ロゲインは1ジャンルとして発展し

ていくべきだと考えています。

でも、「普通のオリエンテーリング」（フットのロングとミドル）をやらない層がいくら増えてもオリエンテーリング界の活性化にはつながりません。うまくつながればよいのですが、残念ながら今は顕著な効果は現れてはいないですね。

彼らはなかなか我々のフィールドには来てくれません……多摩オリエンテーリングクラブのジュニアチャンピオン大会はむしろ例外的にそういった層も参加してくれていますが、そういった層は、「オリエンテーリングクラブ」に入って「運営する側」にまわるということも非常に少ないですね。ミクロで見れば例はあるもののマクロで見ればほとんどゼロではないかと思っています。

### 【藤島】

前にも触れましたが、オリエンテーリングは「…可能な限り出来るだけ短時間で走破するスポーツ」と定義されています。

私もこの定義を根拠に再三「オリエンテーリングは1人で走るスポーツだ」と主張しておりますのと、現時点でのロゲインの広まり、更に「スコアO」と「制限時間の短いロゲイン」の区別のつかなさや踏まえすと、

- ・1人で走りタイムを競う＝「オリエンテーリング」
  - ・グループで制限時間内での得点を競う＝「ロゲイン」
- むしろこのように再定義した方がスッキリすると言いますか、双方の競技の特性を明確に区別でき、双方の競技の普及発展に貢献するのではないかと最近考え始めました。すなわち小野さんのご意見とは逆で、これまで「スコアO」と言っていたものも「ロゲイン」と呼ぶことにする…ということです。制限時間も問わずに、30分でも24時間でもロゲインです。

これはオリエンテーリングとロゲインの関係者双方の議論が必要になりますが、「スコアO」と「制限時間の短いロゲイン」の違いがはっきりしない現状は、オリエンテーリングとロゲイン双方の普及発展に良い影響を与えていないと感じるのです。

「スコアO」は冒頭のオリエンテーリングの定義には厳密には外れてしまう競技スタイルであることと、今もなお各地で開催されている「グループでのオリエンテーリング」を「ロゲイン」と呼んでしまう事で、「1人で走るスポーツであるオリエンテーリング」のイメージの定着を図ろうとする狙いもあります（何十年かかるかも分かりませんが、何十年かけても良いと考えています）。

ロゲインの魅力の1つは、その「自由さ」にあります。制限時間にフィニッシュすれば歩いて走っても良いし、休んでも良い。コントロールを廻る順番も自由です。

オリエンテーリングはタイムを競うスポーツですから、止まって休んでも良いというわけには行かないです。更に廻る順番も決められていますから、ロゲインほどの自由さはオリエンテーリングにはありません。

ロゲインをレクリエーションとして楽しむご家族の方

の話を伺うと、この自由さの違いから「オリエンテーリングよりロゲイニングの方が楽しい」とおっしゃる事が理解できます。

何度も書きますが、オリエンテーリングとロゲイニングは似て非なるスポーツです。

双方の魅力を正しく伝えて行く事が、双方のスポーツの普及発展には不可欠であるという私の考えに変わりはありません。

### 【編集後記】

個人の嗜好でロゲイン大会を運営するもオリエンテーリング大会を運営するもよいと思います。読図講習会もオリエンテーリングの能力を活かして、他団体に貢献していると思います。しかし、オリエンテーリング関係組織にとってはそれがオリエンテーリングを活性化することにどの程度結びついているのか客観的に見つけ、今後の進め方を考える時期に来ていると思います。

この場においても、読者の方にオリエンテーリングを拡げるアイデアも効果的な実践例もお示しできなかったことを残念に思っています。

この議論に参加していただいた方の意見全体を見回してみたり、関係者の方々の声からも、初心者のためのグループのオリエンテーリングでさえレクと受けとめられてきた状況下では、初心者がとつきやすいからといってクイズをとりいれたり、ビンゴOのような形式は、少なくとも控えたほうがよいと思われます。(小野)

\*\*\*\*\*

### ロゲインとは (wikipediaから)

ロゲイニング (Rogaining) とは地図、コンパスを使って、山野に多数設置されたチェックポイントをできるだけ多く制限時間内にまわり、得られた点数を競う野外スポーツである。オリエンテーリングと似ているものの、チェックポイントが多数設置されていること、チェックポイントを辿る順序が決められていないなどの違いがある。

選手権などの大会では競技時間は24時間であり休息・食事・仮眠用のベースキャンプも設けられるが、一般的には2時間や3時間、6時間、8時間、12時間など比較的制限時間の短い大会もある一方で、48時間などの長時間にわたる大会もある。また幼児向けや高齢層向け、初心者向けなど、年齢や熟練度に応じたクラス分けもされている。

オリエンテーリングとは異なり、競技者は一人で回るのはなく、2人から5人のグループを組んでまわることになる。開けた牧場や起伏の多い森林などで長時間にわたるクロスカントリー走を行う体力、忍耐力、グループ内のチームワーク、自然への理解のほか、できるだけ多くのポイントを効率よく周り得点を最大化する戦略やルート選び、決めたルートから外れないように走るナビゲーション能力なども必要になる。

ロゲイニングは1976年にオーストラリアメルボルンで行なわ

れたのが始まりで、日本では2002年に菅平高原で行なわれたのが始まりとされる。

1947年にメルボルン大学登山部が主催した行事の中に、後のロゲイニングにつながる要素があったことがその起源とされる。これらが元になり、1976年4月のメルボルンでのロゲイニング誕生につながる。このスポーツの名称とルールが決められ、世界初のロゲイニング協会(ヴィクトリア州ロゲイニング協会)ができたのはこの時である。以後の10年でロゲイニングはオーストラリアのスカウト運動や大学のブッシュウォーキング(ハイキング)クラブに普及し、世界へも広まった。

ロゲイニングの創始者は、1971年に設立され1970年代にロゲイニング競技大会を多数開催したヴィクトリア州のスカウト運動団体「Surrey-Thomas Rover Crew」のメンバー、ロッド・フィリップス(Rod Phillips)、ゲイル・デーヴィス(Gail Davis)、ネイル・フィリップス(Neil Phillips)の三人であった。「ロゲイニング」という名称や、競技者を意味する「ロゲイナー」(rogainer)などは、創始者三人の名前の頭文字をとっている。現在では「Rugged Outdoor Group Activity Involving Navigation and Endurance」(ナビゲーションと忍耐力を要する険しい野外での団体活動)の略ともされている。世界選手権は2年ごとに開催されている。第一回大会はオーストラリアで200チームの参加により行われたが、2008年の第八回大会はエストニアで22カ国339チーム(計748人)の参加により行われている。



ロゲイン

\*\*\*\*\*

今回の企画いかがでしたでしょうか？  
オリエンテーリングの普及について、皆さんの感想、御意見をお待ちしています。

送り先：

Eメール [ono511@m4.catvmics.ne.jp](mailto:ono511@m4.catvmics.ne.jp)  
FAX 0564-51-9992